
レグラム・オンライン

中学騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レグラム・オンライン

【Nコード】

N2818BA

【作者名】

中学神士

【あらすじ】

VRMMOのゲームが珍しくもないこの世の中、俺は初めてVRMMOのゲームを買うことができた。期待に満ちた起動。

しかし、俺を待っていたのは3回死ねば即記憶消去の最悪のゲームだった

どんどんきえるプレイヤーたち。

さまざまな人間の思惑。

生産スキルを選んでしまったフウトは、この世界で何を起こすのか

…

駄作ですが、読んでいただけると嬉しいです。

どうしてでもある日常（前書き）

開いてくださって、ありがとうございます。

自分の気が向くままに書きました。

一章は基本的に伏線などを入れることを目標としているのであまり面白くないかもしれませんが。

急展開など、注意してください。

とくにでもある日常

今日はどんな人でも基本的にお休みな夢の日、日曜日だ。

「それじゃ、入ってくるわね。」

戸締りに気をつけるのよ?」

「子供じゃないんだからわかってるよ、母さん。」

まったく、出かけるたびにこんなことを言われてたら
流石に少し、いらつきを感じる。

しかし、それで切れるほど子供ではない。

俺のことを思っ言ってくれているのだからな。

「本当、ごめんね。」

どうしても断りきれなかったのよ。

明日には帰ってくるからね。」

「うん、近所づきあいつて大事だからな。

でも旅行か…おみあげよろしく。」

「わかった、とびつきりおいしいもの買ってくるから
期待して待っててね!」

そう言い残し、元気よく部屋を飛び出していった。

もうすぐ40代だというのに、何とも元気な人だ。

あの人がいなくなっただけで、家全体がとても静かで、悲しんでい
るような気さえするほどだ。

本当だったなら、もう少しうるさかったのだろうが、残念ながら家

には父というものが存在しない。
まあ、この話は置いて。

どんなものを買ってくれるのだろう、と期待を寄せつつ
俺は自分の娯楽を楽しむこととしよう。

娯楽、というのも今日発売のゲームが届いているんだ。

その名もレグラム・オンラインという新型ゲーム。

オンライン、という名の通り多人数参加型ゲームなんだが
それよりも特徴的なのが、VRというものだ。

電気信号をいじり、まさにその世界にいるかのような感覚を味わわ
せてくれる。

そこでは、たとえ体重が100を超えていようと、

100メートルを10秒で走ることだって可能になる。

まあ、実際には頭がすっぽり入るヘルメットのようなものをかぶっ
てるだけなんだが。

そんなわけで最近のゲームといったらVR方式の物が多い。

母さんが外へ出たことを確認すると、

先ほどの言葉を思い出した俺は鍵をかけて、自分の部屋へと急いだ。

「おお、こいつがレグラム・オンラインか……」

amazonから届いた段ボールの中を見ると、

思ったより大きなパッケージが出てきた。

パッケージには可愛いらしい女の子と凛々しい男の子が

二人で武器を構えていた。

ファンタジーといったところに、少しだけ期待が膨らむ。

実は、VR方式のゲームをするのはこれが初めてなんだ。

今まで友達に話しただけは聞いたことはあったが、

俺が夢見ていた二次元へ行くのとは少し違うようだ、残念と言わざるを得ない。

時計を見ると時刻は8時30分、朝ご飯はすませておいた。

「いよいよ、か……」

ヘルメット型の機械にソフトを入れ、

ついに初めての起動をした。

ウィーンと旧世代のゲーム機みたいな音がする。

段々と意識が朦朧としてきた

どこにでもある日常（後書き）

どうでしょうか。

ストーリーは進めないといけないが、

伏線を入れるとなかなか進みにくくなる……

そこがなかなか難しいです。

文法的批判など、お待ちしております。

始まりの部屋（前書き）

少し、短いでしょうか。

駄文です。申し訳ありません。

始まりの部屋

次に目が覚めると、真っ白な世界だった。

周りには何も無い。

「ここ……どこだ？」

「ここはアバタールームだよっ！」

背後から突然子供の声が聞こえる。

振り向くと、ウサギのような生物がいた。

「うわぁっ！」

「その反応は傷付くなぁ。」

不思議の国のアリスに出てくるウサギのようだ。

しかし、実際に見るとなかなか不気味だ。

「まあいいや、ここではこの世界の君を決めるから、真剣になっ
ね。」

やり直しはできるけど、その場合はお金がかかるからね。」

なるほど、しかし何一つ決めていない。

考え込んでいるうちに、目の前にパソコンの画面の様なものが見れ

た。

この世界での俺の姿を決める様だ。

こうみても芸術には自信がある。

さあ、どんなイケメンに作ってやる……う……？

……ざつと見るだけで30を超える項目がある。

とりあえず目を選択すると、更に4項目ほど選択肢が出てきた。

選択も、用意されてるのではなく、自分でいじらなければならないみたいだ。

……面倒だ。軽く予想するだけでも約120もの中からすべてを選ばないといけないらしい。

「あああああああつ！！！面倒だ！！！！

おいうさぎ、簡単に決めることはできんのか！？」

早くやりたい俺はいつもの5倍程焦っている。

何が悲しくてこんなキモかわ系動物と一緒にいなければならんのだ。

ウサギは一つ、ため息をついてこちらをバカにした目で見ている。

この野郎……ほんとにキャラクターなんだろうか。

「君、説明書とか読まないタイプだろ。」

右下を押せば自分の姿そのままにベースができるよ。」

呆れたウサギの姿をみていらつきつつ、

右下を見ると確かにシンクロと書いてある。

押すと自分の姿そっくりになった。

「おお、時代は進化したな。」

「君はいつの世界の人だよ……」

うるさい、ゲームなんてあまりしないんだよ！

そこからいじること30分。

遂にイケメンが完成……しなかった。

そこにあるのは俺の姿をさらにひどくした物。

……俺の中の何かが冷めていくのがわかった。

「もう、いいか。もうさ、いいや。」

……絶望したっ！！ゲームでさえイケメンになることを許されない
ことに絶望したっ！！

もう一度シンクロボタンを押し、ベースの状態になる。

そのまま、完成のボタンを押した。

「おや？そのままの姿じゃないか。

まあ、一番動きやすいかもね。

次は職業を決めてもらおうよ。」

そう言われて出てきたのは、いろいろな服装の俺。

ざっと見ても数え切れないほどだ、50……いや、1000はある。

「ささ、選んじやってよ。自分の好きな物を選んじやっていいんだ

よっ。」

そうは言われてもなかなか決めかねる。

ふと、一つの職業が目にとまる。

「じいつは……」

なぜだろう、みているだけで心臓がドクドクする。

「それは鍛冶屋、

冒険者の旅を支える者

材料に魂を入れ、形を与える職業さ。

それを極めた時、その者は創造主と呼ばれるだろうね。

それにするかい？」

「ああ、気に入った。理由は特にないが、とても気に入った。」

突然強力な閃光が起こり、目の前が真っ白になった。

十秒を過ぎた頃だろうか、視界が戻ってくる。

ふと、下を見ると俺は鍛冶屋の服装へと変わっていた。

「それじゃあ、この世界を楽しんできてよ。」

できるものならね

「えっ、どうゆづっ!?!?」

理由を尋ねようとしたら、また強力な閃光が起こった。

遭遇とオカマ(前書き)

すこし無理やりです。

申し訳ございません。

遭遇とオカマ

「うっん……？……っは！？」

田舎のにおいがする。

ここは……草原？

においまで再現されてるのか……最近のゲームすげえふと、あたりを見回すと近くに大きな白い壁がある。

どうやら町のような。距離で大体300メートルほどか。

とりあえずあそこに向かおう、と思ったが、突然ゼリー状の生き物がポン、ポン、と出てきた。

「す、スライムか！？うわ、きめえ……」

俺がこう思うのをヘタレだと思っ人がいるかもしれない。だが考えてみてほしい。

1メートルほどのプルプルしたのが、何匹も跳ねてるのを想像してみてくれ。

しかも、良く分からない液を飛ばしながらだ。

どうだ？きもいだろう？

俺はそれをまじかに感じてるわけだ。スタッフは何を考えているのだろう。

しかし、モンスターを目の前にやることといったら一つだ。

「思いっきり、なぐるっ！！」

俺は生まれてから3位に入るほどのストレートを繰り出した。

「うおおおおおおおっ！！！！」

ド真ん中だ、はずれはしない。

俺は勝利を確信しながら、それでもパンチをめり込ませた。ぷにゅ、と猫の肉球を触ったかのような音が出た。

モンスターの上に表示されるダメージ量を見る。

そこには、大きく書かれた一の文字。

俺は逃げ出した、しかし回り込まれた。

良く見ると5匹に数が増えている。

「落ち着け、話せばわかる、な？そんなことで人を殴っちゃだめだぞ？」

決死の説得もむなしく、5人がかりで襲いかかってきた。

タコ殴りだ。劣勢とか、おされぎみとかのレベルじゃない。

文字通り、タコ殴りにされている。

ああ、母さん、先立つ不幸をお許してください……

「あんだ、何やってんの!？」

どこからか飛んでくる声、そしてそれを追いかけるように風が吹いた。

頭の上を白い物が通り過ぎていく感覚がする。
ふと、上に顔を上げると、スライムたちが飛んでいる。

「あんだね!？」

生産職業で、しかも武器も持たずに5体相手に勝てると思ってんの!
!?

ほんと、バカじゃないっ!？」

天使かと思ったら刀を持った、毒舌な男でした。
しかし、助けてくれたことにはわりはない。

「助けてくれてありがとう、ほんとに助か「早く武器を装備して!
!」なにそれ?」

「あんだ、説明書もよんでないの!?
頭ん中でメニューから武器を装備する想像をする、急いで!」

スライムが集まってきてる。急ごつ。
あー、開けゴマ〜、おお、開いた!
そこには小さめのハンマーがあった。装備つと。

「おお、いきなり手にひらに……」

「感動はいいから、来るわよっ!」

数は7、なぜ増える……?」

草むらに隠れたようだ、スライムが見えづらい。
感覚はモグラたたきだ、出てきた奴から叩いていく。

「おつと。」

右から飛んできた。それを半身で避けながら、スライムの飛ぶ方向と逆方向にハンマーを振る。

空中で動きは取れないようで、自分からハンマーへ当たりに来てくれる。

ぶちゅ、と水分を抜いたスライムを握りつぶす感覚がした。

ダメージは…18か、基準がわからないから何とも言えないな、。

落ちたスライムにもう一度ハンマーでつぶす。

今度は7、さつきよりも低い。

しかし、スライムは光となって消えていった。

「おお、倒した！！クックック、所詮俺の敵ではなかったか。」

ってこんなことをしてる場合じゃない。あつちを助けにいかないかと思っただけをみると、最後の一匹がちょうど光になって消えていった。

「おそい！スライム如きに手こずってんじゃないわよ。」

俺の仕事は認められないようです。

それにしても、こいつ男だよな？

もしや、オカマかっ！？

遭遇とオカマ（後書き）

終わり方が良くわからないっ!!!

どこで区切ればいいのか…

衝撃の事実。(前書き)

頭の中で先の話ばかり考えてしまって手元の話が進まない……

衝撃の事実。

突然助けしてくれたオカマに、なぜか説教を受けている。しかも正座をして。

「あなたね、武器も持たずに一人でなんでモンスターに攻撃なんてほんつとバカじゃない!？」

「いや……でも、スライムだったし……」

「言い訳をしない!!大体、そうやって見た目で決めつけるが駄目なのよ。」

このゲームはね、同じレベルのモンスターとタイマンをして、ギリギリ勝てる設定なの。

それなのに、始まってすぐ5匹も同じレベルのモンスターと戦うなんて正気の沙汰じゃないわ。」

なんで、ゲームでオカマに説教を受けているんだろう。

オカマが珍しいのか、それとも説教されてる俺を見ているのかは分からないが、

めっちゃ人が俺を見てる。10000人ぐらい見てる。え?何これ怖い。

そして、みている理由が後者だった場合、俺はこの後どうやってこの人の輪を抜け出せばいいんだ。

ゆでダコのように顔を真っ赤にすればいいのか?それとも顔さえ見せずに全力ダッシュをしようか。

クソ、せめてここが出発地点じゃなければ俺も甘んじて説教を受けただであらう。

そんなことを言ってる場合ではない、とにかく、早く説教を終わら

そう。

「と、とにかく、一度街へ行かないか？
ほら、人も見てるし。」

できるだけ周りの人に聞こえないよう小さな声で教えてやった。

「え？ちよつと、なんでこんなに……？
い、急いで抜け出すわよ！」

さわやかなジャーニーズ系の顔を真っ赤に変え、恥ずかしそうにつぶやいた。

まじで気がつかなかったとは、どんなけ説教に集中してたんだよ……
とにかく、急いで人の輪からぬけだそう。

「おい、走るぞ。」

「わかってるわよ、あんた足遅そうだからしっかり握ってるのよ」

と、いわれ手をつかまれた。

強い力で無理やりたたされる。

痛っ！！足がしびれてやがる。

だが、オカマはそのことに気づかない。

結果、どうなるがわかるだろうか？

「痛い痛いっ！！ちよ、ちよつとまって」

「うるさいー！」

「ぎゃああああああつー！ー！」

脚がしびれた状態で全力ダッシュはないだろ

ついたところは洋風のカフェ。

全体的に白色で、さわやかな印象を受けた。

「助けてくれてありがとう、俺は竹島風徒っというんだ。」

しまったっ！！と思ったがもう遅い。

「……今のは聞かなかったことにしてあげるわ。プレイヤーネームは？」

「フ、フウトだ。あんたは？」

「リン、よ。」

名前までもか。こうなるとオカマなのは自覚症状ありだな。

「てか、なんで助けてくれたんだ？」

今一番の疑問を投げかけた。

これでギルド勧誘とかだったら断ることはできないからだ。だが、俺はギルドに入るつもりはない。すべての人に平等に武器を売ってあげたいからな。

「はじめは、素手って珍しいなって思っただけだったわ。でもね、みてたら全然ダメージ与えてないじゃない。で、気になって調べたら、鍛冶屋じゃない。

それでね。私って侍って職業をしてるんだけど、刀ってのはこぼれが激しいのよ。だから鍛冶屋を探してたの。」

「だけど、鍛冶屋ぐらい探せばいるんじゃないのか？」

「知らないの？ ネットでは鍛冶屋って地雷職業ナンバーワンって言われてて全然いないのよ？
鍛冶屋が作る武器より、モンスターがドロップする武器のほうが強いしね。」

「何…だと…」

「でも、いないはいないで大変なのよ？
武器の手直しや、ドロップアイテムの買い取りとかがしてくれなくなるしね。

でも、作る武器が売れないってわかってるから自分からなる人なんてほとんどいないのよ。」

俺が選んでしまったのは、地雷職業だったようです。

衝撃の事実。(後書き)

今更ながら主人公の名前を出してなかったことに気がついた。

面白い小説の特徴って、なんなんですかね。

訓練（前書き）

ああ、先の話へ早く行きたい……
でも地盤をしっかりとしないとあとでグダグダになるんですよ。

訓練

「わかった。助けてもらったんだし、研ぐのぐらいはただでやってやる。」

やりかたはわからんがな。まったくわからんがな。

「ほんとにつ！？助かるわ、ありがとう！」

少し無責任なのはわかっている。

しかしながら、研ぐ、とはどうやるのであろうか。

念じればいいのか？それだけじゃできはしないだろう。

ハンマーで擦るか？それはゲームとして駄目だろう。

俺が悩んでいることに気付いたのか、リングがバカにしたかのような声で話しかけてくる。

「フウト、あんたまさかだけど、チュートリアルやってないでしょ？」

何なんだそれは。今までの道にいただろうか？

「やってないみたいね、はあ。」

今から地図にマークつけるから、そこへ行ってきなさい。」

そうやってつけられたのは街の中心から少し東にずれた所。ちなみに、あの草原への門は南にある。

「それと、フレンド登録しときましょ。」

いざという時に便利だわ。」

「それをするとなにかあるのか？」

「そうね、まず離れていてもチャットができるわ。

それと、街の中ならどこにいても場所がわかるの。」

なんだそれは、個人情報筒抜けじゃないか。
文句をいいつつ、フレンド登録を済ませる。

「それじゃ、後でね。」

私草原にいるから、終わったらチャットで知らせて頂戴。」

そう言っつてカフェから出ていく。

いや、いい友人？を持てた。幸先がいい。オカマだけど。

しかし、やはりオカマはいい人というのは正しいようだな。
実は生でそっち系の人を見たのは初めてだ。

みんながみんなああいう人なら世界はもっと平和だろうに。

「とりあえず、行ってみるか。」

ついた先はちっさいおっさんがたくさんいる鍛冶場でした。

何これむさ苦しい。

「おう坊主、おめえ鍛冶屋じゃねえかあ。

なんだあ？訓練しに来たのかあ？」

話しかけてたのはちっさいおっさん。

ただし、自分の体ほどありそうなハンマーを持ってる。

なるほど、ここで鍛冶屋としての訓練を受けれるのか。

「はい、そうなんすよ。」

敬語というのは実に苦手だ。

昔からそのせいで先生に目をつけられていた。

しかし、最後の語尾をですますに変えるだけで評価が変わるとい
うのはおかしい。

テストだってまあまあで、提出物だってすべて出した、のにかかわ
らずだ。

授業態度の項目がこと書かれていた。これだから大人は嫌いだ。

「まあいい。なら、さっそくやるかあ。」

訓練が終わった。時間は3時間か、なかなかかかったな。

「もうお前に教えるべきことはない。後は世界を見て、自分を磨けえ。」

「はい。ありがとうございました。」

もうさ、俺この世界の人物にはプレイヤーとか関係なく普通の人として接する。

だって、あれはもう普通の人間だもの。まじすげえ。

立ち去ろうとした俺を小さいおっさんが、ドワーフの親父がひきとめる。

「さて、お前はこの鍛冶屋の最初の弟子だ。これをやろつ。」

そう言ってくれたのは、一つの家の様なもの。
イントリベリを開いてみると、そこには永久安易鍛冶場と書いてある。

どうやら、いつでもどこでも鍛冶ができるという優れ物のようだ。

「親父……ありがとうございますっ……！」

いい人すぎる、ドワーフいい人すぎるよお……

「おう、これからも困ったことがあったらいつでも着ていいからなあ。
」

「はい……」

こうして、鍛冶屋としての人生がスタートした。

訓練（後書き）

うまい人ってかきかたからまず違いますよね。

一度ああいうかきかたに挑戦してみましょっか？

俺は鍛冶屋、のはず（前書き）

この話は書き直しをするかもしれない

申し訳ございません。

俺は鍛冶屋、のはず

やっとのこさ、鍛冶屋としての仕事ができる。
そういえば、リンにも報告しておくべきか。
さっそくチャットを試してみる。

「おーい、聞こえてるか？」

話す相手は当然リンだ。

「聞こえてるわよ、うるさいわね。」

やっと終わったのね、じゃあ南の門に来て。」

「わかった。」

少し急ぎ足で歩くこと3分。

相変わらずのイケメンがいる。

周りの奴も顔をイケメンに作るのをあきらめたからなのか、妙に目立っている。

中身がオカマでなければ、さぞモテタであろうに……

「お待たせ、悪いな。」

「いいわよ、別に。」

それより、あんたのために狩場を見つけてあげたわ。
感謝なさい！」

俺さ、気付いたことがある。

こいつってさ、毒舌じゃなくてツンデレ……いや、なんでもない。

どちらにしろ、オカマのツンデレなどみたくない。言いたくもない。そんなことを考えている間に門の外へひきづり出された。門を超える例の草原がみえる。もうログアウトしたのか、あまり人は見えない。

「さあ、こつちよ。」

頭の中をぐるぐると回っている疑問を投げかけた。

「あのさ、俺って鍛冶屋じゃん？」

別に狩らなくても、武器を作ればレベルは上がるんだけど……？」

そうなのだ、戦闘職以外の人もレベルが上げられるよう、それ以外の方法でもレベルを上げることができるのだ。

「はあ、あんたってほんとバカね。」

「じゃあ、武器を作るために必要なものは？」

「え？そんなの素材に決まって……あ。」

「そういうこと、今向かっているのは炭鉱よ。」

ピッケルがあれば鉱石を掘ることができるの。

はい、これ貸しなんだからね！」

そうやって渡されたのは大きなたるはし、もといピッケル。

「それとパーティを組むわよ。」

パーティになれば一部アイテムの共有、経験値の共有など、いろんな利点があるのよ。」

「わかった。いろいろすまないな。」

「いいのよ、どうせあんたしか知り合いいないんだし。実は言うとな、少しさびしかったの。」

やっぱりそういう系は知り合いが少ないのか。世間では生きづらいのであろう。

そうこうしてるうちに炭鉱へと到着した。意外に近いな。

「それじゃ、掘りまわろう！」

と、せっかく勢いづいたのに、モンスターが現れた。とりあえずハンマーを装備、しようとしたら戦闘が終わった。あるえー？

「……………あのさ、リンってレベル何レベル？」

「18、ね。多分トップクラスだと思うのだけれど、上には上がいるって言うし、もたもたしてられないわ。」

……………おかしいと思ってたんだ、俺。そうだよな、いくら生産職とはいえ、一プレイヤーをぼこぼこにしてる

スライムの群れを弱い奴が助けられるはずないもんな。ちくせう。

「結構取れたな。」

「そうね、そろそろ戻ろうかしら。」

掘ること30分、結構とれた。

鉄鉱石23個

銅鉱石15個

銀鉱石1個だ。

「でも本当にもらっていいのかわかる？
特に、銀鉱石はレアなんだろう？」

「別にいいわよ。この前も行ったけど、そんな物鍛冶屋にしか使えないの。」

鍛冶屋も人数少ないし、売

」

あれ？声が聞こえない……頭が、ふらふらする。
バタ、という音がした。

「 リン！？」

仰向けになったリンに声をかけた、が、声あまり出ない。

駄目だ、意識が、遠く

「 丈夫 しっか 起き さ 」

なんだ……？声が、聞こえる。

「起きなさい！フウトー！」

ヒデブウー！！思いっきりしばかれた。

「おいリン！！なににもそん、な……に……」

声が出なくなつた。精神的な意味で。

そこには、さわやかな青年の姿も、オカマ言葉の違和感もなく、聞こえてくる声は間違いなく女性のものだ。

凜とした、はっきりとした声だ。間違つても男の声ではない。

長く少し茶色の混じつたしなやかな髪

キリ、とつりあがつた目のだが、性格を考えればこの上なく似合っているであろう。

たとえ整形をしたとしても、ここまでの美人にはならない。

「そ、そんなに、顔をみられると、恥ずかしいんだけど……？」

ちがう、認めない。あのリンが、さわやかな男のはずのリンが、こんなツンデレ娘なわけがない。そう、あいつは毒舌のはずだ。自分でそう決めたではないか。だから俺は、こつ聞き返す。

「……………どちらまで、いましてしょうか？」

俺は鍛冶屋、のはず(後書き)

スキル

鍛冶 レベル1

開始の音（前書き）

今回で一段落です。

他の方の小説を呼んでいると、私の文章力のなさに悲しくなってきました。

お気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます。

開始の音

「な、何言ってるの？私はリンよ？」

どうやら、認めざるを得ないようだ。

目の前のアイドルみたいな美人が、リンであることを。それでも俺は、抵抗を試みる。

「うそだな」

「……はあ、やっぱり姿が変わっちゃってるのね。ただの勘違いだと思ったのだけ」

次の言葉を聞いた瞬間、リンは目を大きく見開き、驚愕の感情を浮かべ、

「リンならもつと胸がまな板のようだ。」

そして、羞恥と怒りの感情へとシフトチェンジさせた。

「へ……へんたいっ！！ばか！！あんたってほんとにバカ！！」

どこ見てるのよっ！！最低！！」

……ああ、こうなることは予測ぐらいできたよ？

しかしだ、俺はまだ中学生の身故に、巨乳、そう呼ばれる女性をまじかで見たことがない。

どんなに大きかったって学校ではああ、膨らんでるな、とわかる程度だ。

それをましてやメールも離れていないんだ。

俺が口走った感想は男性なら7割は共感してくれると信じてるぞ！
ただ、共感してくれたからといって俺が今この窮地から脱出するわけではない。

自らの過ちなのだが、十秒前に戻れるならなぜその抵抗方法を選んだんだと叱ってやりたいほどだ。

今おれが起こすべき方法はわかっている。

膝を試合に負けた高校球児ほどの脱力感を見せつつ、地面へと下ろす。

そして、視界を時速50キロほどは出ているのではないか？と思うほど早く地面に近づける。

そう、俺が今しているのは、日本文化の伝統、

「つまってた、ロマンが、詰まってたんだ……」

土下座である。

「それにしてもどうして私だけ元の姿になったのかしら？」

その疑問に、殴られて頭が大きく腫れあがった俺が答える。

「あー、俺さ、これが元の姿なんだ。」

「……はあ、ばか。リアルでの知り合いが見たらどうする気よ。でも、それじゃあみんな元の姿に戻ってるのかしら？」

「そう考えるのが妥当だろうな。」

オカマもとい、男性の姿をしていた理由を尋ねると、
もともとソロの予定だったらしく、装備できるアイテムが強いかららしい。

ここで解説しよう、

女性用の装備は特殊能力がつけやすく、
男性用の装備は基本能力が高めに設定できるのだ。
以上、早速覚えた知識を自慢してみた。どや？

……話を戻そう。

「それにしても、あんたてっきりサラリーマンが若さを取り戻した
いから

そんな若々しい姿してると思ってたけど、私より年下なのね。」

失礼な、まだまだ花の中学生ですよ？

「それなら俺もあなたのことおかしいと思ってたよ。本物のオカマなら普通女性に設定するもんな。」

「う、うるさいわね、口調のことまで考えてなかったのよ。もうほんと最悪、年下にオカマ扱いされるなんて……」

「ははは、ってそうじゃない！とりあえず街に戻ろう。今頃街はパニックだろうな。」

考えたくはないが、女性の服を着た男性もいるんだろうな。

「そういえば、さっきエストが来てたわよ。それを押せば街に帰れるみたい。」

「おお、やっぱり何かのバグなのかな？とりあえず、街へ急ごう。」

街へワープをすると、多くの人々が文句を垂れていた。

「どうなってやがる！俺はログアウトをしたはずだぞ！？」

「そんなの私もよ！始まってすぐログアウトしたのに！！」

「そんなことより、なんで俺の姿が元に戻ってんだよ！

こんな姿、恥ずかしくて人前に歩けねえよ……」

さまざまな阿鼻叫喚が繰り出されている。

なるほど、ログアウトをした人も意識を失っていただけで、現実世界には帰れてないのか。

いったい何が目的なんだ？

「君たち、静かにしてよ。僕のスピーチが聞こえないだろう？」

そういつて出てきたのはあのウサギ野郎だ。

相変わらずきもいな……

「おい、あいつ誰だ？」

「知らない、スタッフかなんかじゃないの？」

なに？あいつを知らないだと？

そんなバカな、始めるときに会っているはずだ。

「なあ、リン、始める時ってどんな感じだった？」

「え？そんなの、文字が目の前に現れている指示されて終わっただけど、

それがどうかしたの？」

なんてことだ。でも、なぜ俺にだけ声をかけた？

俺か？俺が何かをしたのか？……うーん、思いつかない。

「君たちには、これからログインしっぱなしでこのゲームのラスボス、

ウサギ君30号を倒してもらおうよ。

もちろん、ログアウトなんて認めない。

でも安心してね、無理やりはさされても、君たちを殺したりなんかしないからさ

ちよーっと記憶を消させておらうだけさ。まあ、どこまで消えるか僕の知ったこっちゃないけどね。」

周りから音という音が消えた。

文句を言ってた集団も、混乱に襲われるか、理解してしまつて絶望に襲われるかのどちらかになっている。

「なによ、それ、むちゃくちゃじゃない。

記憶を消すつて、そんなことしたら下手したら人格さえきえてしまっ
うわ。

それつて、遠まわしに死んでるのと同じじゃない!!」

リンの叫びに、周りの集団は泣きだすものさえ出てきた。

「ルールを説明するよ？」

この世界では3回死んじゃうと強制的にログアウト、つまり記憶除

去だ。

僕は弱い者には興味がないからね。

それと、レベルは今までの10倍上げにくくさせてもらっよ？

一か月でクリアなんてされたらこんなことをした意味がなくなっちゃうじゃないか。

ルールは以上、それじゃ、頑張ってねー！」

そう言い残し、ウサギは消えていった。

ポーン、という音がした。

これから始まる絶望のゲームの、始まりの音だった。

開始の音（後書き）

今回の話から三日ほど更新を休ませてもらいます。

話自体は考えているのですが、

つなぎの部分などや今までの話などを見直させていただきます。

次話も見てくださいとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2818ba/>

レグラム・オンライン

2012年1月14日09時47分発行